



父の愛、つつましく切なく

松本 侑壬子・ジャーナリスト

昨夜見たあるブログに「男って、いつ父親になるのだろう？」という言葉があった。パートナーのお腹の胎児が今11ミリなのだが、「自覚がないので」と考え込んでいるようだった。

本当に、父性愛とはどこから生まれてくるものだろう。いや、母性愛だって、産めば自然にという本能ではない、とフランスの哲学者エリザベート・バダンテールは言っている。今月の作品は、ちょうどこのテーマにぴったりかも？

第二次世界大戦前夜の1938年から7年後の終戦までの、北イタリア、ポローニャの町の家族の話である。17歳の女子高生ジョヴァンナは、自分の高校の美術教師である父ミケーレと美しい母デリアと3人暮らし。自分の容姿に自信がなく、引込みがちな暗い子で、ボーイフレンドなど一人もいない。子煩悩なミケーレは、そんなジョヴァンナが気がかりでいじらしく、いつも励まさずにはいられなかった。

ある日、娘が珍しく校庭で人気者の男子生徒とうれしそうに話をしている姿を見て、教師であろうことか、その生徒を呼び、「進級できるかどうかは自分の一存にかかっている。娘のジョヴァンナをよろしく」と言ってしまう。

何も知らず、思いがなかった、と大はしゃぎのジョヴァンナを冷ややかに見る母親デリア。こんなサエない娘をモテ男が相手にするはずが

ない、とむしろミケーレを疑いの目で見る始末。

有頂天のまま同級生の誕生日パーティーに出かけたジョヴァンナは、羽目を外して異常行動に出、さらに数日後には、殺人容疑で逮捕される。一体何が起こったのか。

もしや？のミケーレの不安は的中した。自分の愚かな父性愛がジョヴァンナの勘違いを引き起こし、ライバルの口からそれを暴かれたジョヴァンナの細い神経は相手に向かって爆発してしまったのだ。心身喪失と認められ、町から遠い病院に移送された娘に会いに、職を辞した父は足しげく通わずにはいられない。

だが、娘はいつも「お母さんは？」と恋しがり、母親が身に付けているものを欲しがった。実は、デリアはショックで自分の気持の整理がつかず、ジョヴァンナに会う決心がつかないと言って、ついに一度も来ようとしなかった。

担当医師から、ジョヴァンナは美しい母に劣等感を抱き続けており、母は父とは違う男に恋していると思い込んでいる、と聞かされたミケーレには、思い当たるものがあった。時局は世界大戦に入り、イタリアはドイツ側について参戦するが、向かいに住む美男で頼もしい刑事の親友セルジョに傾く妻デリアの気持に気づいていた。ミケーレは爆撃で家族を失った親友に、自分は病院の町へ移るので、デリアをよろしくと伝え自ら身を引くが…。

目まぐるしく移り変わる時代の流れの中を、一筋貫くもの — 父の不器用でつつましいが強い愛情である。母親であることを全うできないもどかしい思いの妻に代わり、母への憧れと劣等感の間で揺れる複雑な娘心に寄り添う。古都ポローニャの夕暮れにしっかりと包まれる家族の愛情物語。アヴァーティ監督の故郷への恋文のような作品である。

『ポローニャの夕暮れ』

イタリア映画 (104分) / プーピ・アヴァーティ監督

初夏、渋谷ユーロスペース、銀座シネパトスほか
全国順次ロードショー

©2008: DUEA FILM-MEDUSA FILM

